

トランスフォーマティブ・ツーリズムへの参加動機と内的変容

—畏敬の念に着目して—

宮下 麻美

(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程)

要旨

本研究は、インド・ラダックにおけるフィールド調査や半構造化面接などの質的データをもとに、畏敬の念に着目して旅行者のトランスフォーマティブ・ツーリズムへの参加動機ならびに体験を通じた変容を内的な側面から明らかにした。その結果、「生きづらさ」「ノスタルジア」「神秘的な体験」「対話の鏡」「地続きの暮らし」「心の追体験」は、旅行者が変容を遂げる上で重要な要素であると考えられた。近年、国内でも注目を浴びているトランスフォーマティブ・ツーリズムのコンテンツ高度化や科学的な根拠に基づいた国内外への合理的なプロモーション活動に貢献するものである。

Keywords : トランスフォーマティブ・ツーリズム, 畏敬の念, 変容, ラダック

はじめに

近年、スピリチュアルは大切にしながらも宗教活動にはコミットしない信仰スタンス (Spiritual But Not Religious : 以下 SBNR) を持つ人々を中心にトランスフォーマティブ・ツーリズムが注目を集めている。米国のトランスフォーメーション・トラベル・カウンシル (Transformational Travel Council) によると SBNR を持つ人々は目に見えない精神的な価値への関心が高く、伝統的な信仰や宗教と思想文化の中で培われた価値観との親和性が高い。また彼らは旅行において、内なる成長や深い自然のなかでの精神的な挑戦など経験的価値を重視する。加えて SBNR を持つ人々は、消費単価が高く国内旅行消費額の約 40% を占める (HAKUHODO inc & SIGNING inc., 2023; 観光庁, 2022)。国別の SBNR を持つ人々の割合を調査した SBNR レポートによると日本人の 43% が SBNR の立場を示しており、諸外国と比較しても多い。本研究は、特にツーリズムに関連する「畏敬の念」の感情に着目し、インド・ラダックにおけるトランスフォーマティブ・ツーリズムについて、エスノグラフィーの手法を用いて変容を通じた内的なプロセスを捉えようと試みた。これによって、トランスフォーマティブ・ツーリズムの体験が旅行者にどのような変容を起こすのかを検討することを本研究の目的とする。

先行研究

トランスフォーマティブ・ツーリズム

「誰もが旅によってある程度変容する (Lean, 2012)」. Sheldon (2020) によれば、トランスフォーマティブ・ツーリズムとは、旅行者が「意識の覚醒の一部であり、セルフ・アウェアネスや人生の目的への自己探求を高め、より高次の価値観による生き方や他者へのより大きな貢献を生み出す」内なる旅に従事するプロセスと定義し、観光が個人の内的変容にどのように関係し、促進しうるのかを検討している。それによると人や環境との深いつながり、自己探求、貢献の 4 つが重要なシナリオであり、畏敬の念や驚き、ピーク体験、混乱させるような葛藤や挑戦、フロー体験、スローダウンによるマインドフルネスの向上が意識の変容につながる瞬間であるとしている。ツーリズムでよく経験される内的な変容は、マインドフルネスの向上・価値観や信念の転換・人生の再定義・ちっぽけな自己の超越・大いなる存在とのつながりや一体感などであった (Sheldon, 2020)。また変容した旅行者の自己アイデンティティと社会的アイデンティティは、ディステネー

ション住民との道徳的な絆を築くことで変化し、変容した旅行者は謙虚さが高まることが明らかになっている(Soulard et al., 2021). 一方で旅行者の変容の動機や旅行中の感情経験が変容に与える影響、変容経験が日常行動に与える影響やその持続性などについては十分に検討されているとは言えない。また変容プロセスをうまく進めるためにはツアーガイドとのつながりが重要である (Baral et al., 2008; Irimiás et al., 2020) との指摘を踏まえるならば、旅行中のツアーガイドと旅行者との関わりを検討していく必要があるであろう。内なる旅のプロセスの理解を深める上で、旅行者の認知的側面だけでなく感情的側面を考慮することは重要である。本研究ではポジティブ感情のうち、特にツーリズムに関連する畏敬の念に着目する。

畏敬の念

星空を見ること、宇宙から地球を見ること、出産に立ち会うことなどは畏敬の念を引き起こす経験である。畏敬の念は、認知的にも概念的にもスケールの大きいものに対して感じられることが多く、その処理には自分の心の枠組みの認知的適応を必要とする (Keltner & Haidt, 2003)。適応とは新しい経験に同化できない精神構造を調整するピアジェのプロセスを指し (Piaget & Inhelder, 1969), 広大なものの経験を理解できないときの精神構造への挑戦や否定が含まれる (Keltner & Haidt, 2003)。身体的特徴として、畏敬の念を抱いている時に鳥肌と寒気という現象が共起し (Algoe & Haidt, 2009; Maruskin et al., 2012; Schurtz et al., 2012), 目を見開く、あごを引くなどの表情を伴う (Shiota et al., 2003)。また畏敬の念は不思議・驚愕・尊敬、時には恐れといった感情と結びついており、快感であると同時に不快感や圧倒感を与えることもある (Fredrickson, 2013; Gordon et al., 2017) 発表者はこれまで日本と英国の修士課程において、畏敬の念に着目し、山を歩くという行為が wellbeing に与える影響について心理学の観点から研究してきた。その結果、山を歩きながら畏敬の念を抱き、自分の存在がちっぽけだと感じる経験は、その人の謙虚さや寛大さを高め、自己の利益よりも社会全体への幸福へとより大きな視点で人生を捉えることで wellbeing を高めることを明らかにしている。また畏敬の念は思いやりや感謝といった向社会的行動とも関連している (Nelson-Coffey et al., 2019)。さらに自己概念の調整と他者や自己を超えた存在とのつながりを感じさせ、その結果、思いやり・感謝・愛・楽観性などのポジティブ感情も促進する (Nelson-Coffey et al., 2019)。加えて畏敬の念を抱いて生活することは、スピリチュアルな信念を向上させたり (Van Cappellen & Saroglou, 2012), 人生の意味を高めたりすることで (Anderson et al., 2018; Rivera et al., 2019), うつ病やストレス関連障害などの予防につながる可能性も示唆されている (Stellar et al., 2015)。

研究課題

以上、先行研究を踏まえて具体的なリサーチクエストを以下の通り設定した。

1. 旅行者はどのような動機付けでトランスフォーマティブ・ツーリズムへ参加するのか？
2. トランスフォーマティブ・ツーリズムにおける畏敬の念を抱く経験は、体験者にどのような変容をもたらすのか？

研究方法

本研究は、インド・ラダックに来訪した日本人とラダック人を対象として 2024 年 6 月から約 4 ヶ月間にわたって行われたエスノグラフィーに基づく、現地滞在、個人・グループインタビュー、フィールドノートなどの資料の質的データの分析に基づいている。

調査地

インドの北端、平均標高 3,500m の山岳地帯に位置するラダックで調査を実施した。ラダックは、チベット仏教を信仰し古くからの伝統文化を守り続ける人々が住むエリアである。ラダックが旅

行者を惹きつける魅力は「リトル・チベット」と称されるように、チベット仏教の醸し出す雰囲気味わえること、さらには畏敬の念を抱くような壮大な山々の景色である。(Harrison, 2021 ; Harvey, 1983). また Williams-Oerberg (2020)は、ラダックは「平和でスピリチュアルな現代のディストピアを救う場所」というイメージ付けに成功しており、西洋の物質主義・不幸に対するアンチターゼ的な役割となっていることを明らかにしている。このようにラダックは、時間を超越した風景や人としての理想像に興味を持つ旅行者を惹きつけている。従って、ディステネーションとしてラダックを選択する者は、SBNRを持つ人である可能性が高いことが想定された。

調査対象者

2024年6月から7月に日本人10名(男性5名, 女性5名)に対してグループインタビュー形式で面接を行なった。NPO 法人が企画するツアー参加者に、法人の代表者を介してインタビューへの協力を募った。この法人は、スローライフ・ムーブメントと出会いラダックの伝統的な暮らしの良さを再認識したラダック出身のJさんが日本で設立したものである。環境に優しい持続可能な社会作りを目指した取り組みを行っており、日本人向けにラダックでのスタディツアーやホームステイを通じて伝統的な暮らしを体験するプログラムを提供している。ツアーの内容は、伝統的な農村でのホームステイ、チベット仏教の寺院訪問、シャーマンへの訪問など、旅行者のニーズに合わせて企画・実施される少人数制のツアーである。

調査の対象となったツアーは2企画であった。1つ目はEさんとJさんの共同企画で実施されたものであり(参加者:Cさん・Dさん・Fさん・Gさん・Hさん)、2つ目はBさんとIさんの2名で組まれたツアーであった。またAさんは、JさんのNPOの仕事を手伝いながら長期滞在しており、一部ツアー(シャーマン体験)にも参加した。基本的にはJさん自身がツアーガイドと通訳を務めた。またトランスフォーマティブ・ツーリズム体験者とツアーガイドとの関わりを検討するため、企画者であるEさん・Jさんにも個別インタビューを実施した。さらに筆者は「完全なる参加者」として、一部ツアー(シャーマン体験)の参与観察を行なった(参加者:Aさん・BさんとIさん・Jさん・筆者)。またツアー参加者がディステネーションから日常へ戻った後の行動変容を捉えるために、本調査協力者のうち同意を得られた6名(男性4名, 女性2名)については、日本へ帰国後1ヶ月以上の期間を空けてZOOMを用いたWEB上で個人面接を実施した(表1参照)。EさんとGさんは2023年に同法人が企画するツアーに参加、Fさんも同年に他のツアー会社を利用してラダックを訪問しており、3名は今回2回目のラダック訪問であった。

表1. 調査対象者の属性

名前	年齢	性別	職業	旅行期間	個人面接
A	20代	女性	大学生	4ヶ月間	-
B	40代	女性	会社員	1週間	○
C	20代	男性	無職	2週間	○
D	30代	男性	自営業	2週間	○
E	20代	男性	自営業	2週間	○
F	60代	女性	自営業	2週間	-
G	20代	女性	会社員	2週間	○
H	20代	女性	会社員	2週間	-
I	40代	男性	会社員	1週間	-
J	60代	男性	NPO 法人代表	-	○

倫理的配慮

事前に調査対象者の自由意志、匿名性の確保、同意撤回について説明し口頭で同意を得た。

インタビューガイド

ツアー参加者へのグループインタビューは、ラダック到着後2日以内の高度順応期間のタイミングで実施した。そのため質問項目は、ラダックに興味を持ったきっかけやツアー参加動機を中心に構成された。また帰国後の個別面接の質問項目は、トランスフォーマティブ・ツーリズムを体験した旅行者のインタビューを分析した Soulard et al. (2021)を参考に作成した(表2参照)。

表2. インタビューガイド

問1. 今回、どのような点に惹かれてラダックへ行きましたか?
問2. この旅で、最もパワフルだった瞬間について教えてください。
問3. この旅で、カルチャーショックを受けたり、混乱や不快を感じたりした経験について教えてください。
問4. この旅で、あなたは自分自身についてどのように感じましたか?
問5. この旅の経験は、あなた自身やあなたの世界観にどのような影響を与えましたか?
問6. この旅は、あなたのアイデンティティや自尊心にどのような影響を与えましたか?
問7. この旅で起こったことをすべて消化するために、旅の間、自己内省をしましたか? (例: 日記を書く、他の旅行者との対話など)
問8. 帰国後の日常生活でのあなたの行動の変化について教えてください。
問9. もし友人があなたと同じような旅に出ようと考えていたら何を知って欲しいですか?
問10. 私が尋ねなかったことで、付け加えたいことがあれば教えてください。

データ分析

Soulard et al. (2019) に基づき下記7つの基準を用いて、提供される体験が変容的であるかどうかを確認した。

1. 旅行者とディステネーション住民が長期にわたって有意義に交流する。
2. 旅行者とディステネーション住民の間で相互に有益な交流を生み出すことを目的に旅行が明確にデザインされている。
3. 旅行者の自己内省を促進するような活動が旅程に意図的に組み込まれている。
4. 旅行客をコンフォートゾーンから抜け出させるようなアクティビティが含まれている。
5. スキルアップと異文化理解を促すアクティビティが含まれている。
6. 組織は社会文化や生態系への影響を軽減するための行動をとっている。
7. 組織はディステネーション住民を社会的に責任ある方法で扱うことを目的としている。

インタビューで得られたデータは、ツアーへの参加動機と畏敬の念に焦点を置いた内的な変容について整理した。筆者は「完全なる参加者」として、シャーマン体験の参与観察を行った。このような一人称的なアプローチには方法論的な限界がある。筆者の内的体験を主観に偏りすぎることなく中立的で冷静な視点を保ちつつ探求するため、英語を母国語としてヒンディー語が堪能なチベット仏教を専門とする宗教学専門のアメリカ人研究者1名が同席し、フィールドノートに記録した。

結果

インタビュー内容を分析した結果、「生きづらさ」「ノスタルジア」「神秘的な体験」「対話の鏡」「地続きの暮らし」「心の追体験」の6つのカテゴリーに分類された。以下、詳細を解説していく。

生きづらさ

元々大手広告会社で勤務していた B さんは、会社員時代を振り返ってこのように語った。

B さん：“会社員時代の 16 年間は、自分の中で異常な状態だった。一種の熱病みたいな感覚で、自分が満たされていないことが分からないくらいラットののように忙しい生活を送っていた。会社を辞めて、本来の自分に戻ってきた感じがする”

日本社会での生活に窮屈さを感じ、自分にとっての幸せや豊かさを模索している中で、ラダックの社会や人としての在り方に共感し、ツアーへの参加を決めた旅行者は多かった。A さんはラダックとの出会いをこう語った。

A さん：“満員電車で通学していると、毎日誰かが舌打ちしているのを目にしている。「本来、人はもっと優しいはずなのに」って思っていた頃にラダックの本を読んだ。すごく人が優しくて、支え合って生きているのが当たり前で、自給自足の社会だって聞いて興味をもった”

また D さんは、社会人として生きていく中で、自己の存在意義が失われた経験をこう語った。

D さん：“社会人になると、自分の気持ちよりもルールで決まっているからこうしないといけないってことが多かった。そういう毎日を過ごしていると、自分はこの先どう生きていったら良いのか分からなくなっていった。自分のことなのに、自分のことがだんだん分からなくなっていくことに気がついて、それがとても怖かった”

ノスタルジア

ツアー参加者はラダックに到着したばかりにも関わらず、ラダックを異国の地であると感じた者は少なかった。インタビュー当日の朝に到着したばかりの B さんは、ラダックの印象を次のように語った。

B さん：“直感的にタンザニアとラダックは似ている。自然と一緒に生き、お金がなくても幸せで満ち足りている…「なんでそんなに優しいの？」って聞いても、彼らにとっては当たり前すぎて「え、その質問の意味がわからない」って言われたんです。日本にも急速に発展する前までは、そういう文化が残っていたと思うんです。今でも田舎に行けばそういう文化は、少しは残っている。だけどみんな忙しすぎてその感覚を忘れてしまっているんだと思うんです。でも無いわけではない。だからきっと懐かしいって感じて、思い出す感じがするんじゃないかなって思うんです”

神秘的な体験

J さんは“ラダックのシャーマンはトランス状態になる。他のシャーマンに訓練を受ける。特に女性はシャーマンになる前は狂気に満ちていて、それは霊が入りたがっていることを示している”と教えてくれた。シャーマン体験はシャーマン本人の自宅において行われた。その場には地元の人たちを中心に約 40 名がシャーマンに助言を求めて集まっていた（図 1 参照）。体験後、移動の車内でシャーマンが神を憑依させるためにマントラを唱えながら鐘と太鼓を鳴らしていた場面の話題になった。

筆者：“シャーマンが憑依させていた時あったじゃないですか。太鼓とベルの音がしている間、シャーマンにカタ（儀礼用の絹のスカーフ）を渡さないといけないのにすっかり意識が飛んでいて、J さんに肩をポンポンと叩かれて、はっと我に戻った感じでした”

B さん：“あの時ちょっと、トランス状態みたいな感覚だったよね”

筆者：“まさにそんな感じですよ。私トランス状態になっていました”

B さん：“わあ～って引き込まれる感じで、ふっと（こちらの世界に）戻ってこないといけない感じだった”

筆者：“私は J さんに戻してもらった感じですよ。1 番最初だったから「(肩叩かれて) あ、ごめんなさい、カタ渡さなくちゃ！」って”



図1. (1)写真左：筆者がシャーマンから助言をもらっている場面（左からシャーマン・筆者・通訳兼ガイドのJさん）、(2)写真右：シャーマンが病人の患部に管で吸い付き不浄な黒い塊を吸い出す治療を施している場面（写真(1)、(2)共に同席した宗教研究者撮影、2024.07.14）

また Aさんはチベット仏教の僧院を訪問した時の不思議な経験を次のように語った。

Aさん：“僧院の中に入って五体投地で拜んだ後に「厳かだなあ、畏れ多いなあ」って思いながらしばらくの間、仏像をぼーっと眺めていたんです。そしたらなぜか分からないんですけど、いつの間にか泣いていました。エネルギーに気圧された...キャパシティオーバーって言葉が正しいかもしれないです。自分のエネルギーの器があって受け取りきれずに涙として溢れてきたみたいな感じ、ただただすごい...圧倒される感じでした...今は、見えない世界は存在する、そう思わざるを得ないと思い始めています”

今回で2度目のラダック訪問である Gさんは、昨年と今年の経験を比較しながらインタビューに答えた。1度目の訪問時は、有名なチベット仏教の僧院やインド映画のシーンに使われたパンゴン・ツォなど主要な観光地を巡った。その際はラダックの壮大な景色や山々に圧倒されたことが1番印象的であったと語った。Gさんは当時を振り返って“やっと地球に会えた感覚”と表現した。また今回のツアーは、現地の人々の暮らしに触れたくて参加を決意したという。僻地の村にホームステイで滞在中、ホストマザーと共に家畜の放牧に山へ行き雄大な自然の中で家畜とホストマザーと自分だけの世界となった。その瞬間、本当に遠くの地へ来てしまったことを実感し、自分のちっぽけさを感じ、ふと淋しさで涙が出たと語った。

対話の鏡

Eさんのファシリテートのもと、不定期ではあったがツアー参加者はその日にあったことをグループ内で共有する時間が設けられていた。Gさんは、自分の気持ちを言語化することに難しさを感じ最初は戸惑いを感じた。しかし自分自身がうまく言語化できなくても、誰かの発言が自分の中に入ってくることで消化されスッキリすることがあったという。Bさんも、Eさんの企画するツアー参加者と交流をした際に、“まるで自分が話していることを他の人が話しているような感覚で、自分の声を客観的に聴いている感じがした。自分の中で慣れ親しんだ価値観であるはずなのに、違和感を覚える自分がいた”と Gさんと似たような感想を語った。つまり参加者は、他のメンバーとの相互の間に「対話」という鏡を置いて、対話を介して、自分の心を相手の心に映し、そして自分の心を理解していたのである。Cさんも、他者との共有を通して次第に感情の整理ができるようになり“気持ちが自由になっていった”と語った。

地続きの暮らし

Dさんは現地の人々と暮らしを共にする中で得た気づきと帰国後の心境を次のように語った。

Dさん：“（ラダックの人たちは）自然に沿った暮らしをしていた。畑仕事や放牧仕事も「仕事」って言葉を使うけど、それも含めての暮らしの一部で、人と人との関係性においても温かな視線が行き交っている感じがした。それが人本来の暮らしのあり方であると感じた。その場にいるだけで満たされる、これ以上必要なものはないなっていう感覚だった…全てが自分の一部という感覚でそのつながりの中にいる安心感と心地良さを感じた…（日本でも）そう感じながら生活したい”

またBさんもラダックでの滞在を、“実家に帰省する感覚”と表現し、気を使わずにゆったりと過ごした日々を振り返りながら、“（帰国しても）ラダックとつながっている。別のところにいる気がしない”とも語った。またそのつながり感は安心感となり、住む家や仕事など物質的なものへの執着から解放されたと述べた。

心の追体験

Eさんは、昨年一人でラダックを訪れ、ザンスカールで最も人口の多いパドゥムから北に約82kmに位置するリンシェからさらに徒歩で1日歩いたディプリングに滞在した（図2参照）。現在リンシェとディプリングをつなぐ道路開発が進んでおり、3年以内には完成予定である。昨年は徒歩で丸一日かかったのに、今回は約5時間でたどり着いた。Eさんの想像を超える開発のスピードに困惑したのだという。

Eさん：“途中のロバの放牧場は、テントを張って1泊した思い出の場所だった。そこは地元の男性が「ここは自分が作ったんだ」と自信満々に話してくれたところだった、今はもう更地になっていた。大切にしていたものを壊されたような、拒絶されたような感覚で悲しかった”

しかしEさんは、ディプリング到着後にその男性と再会したことで、悲しみが安心感に変わったという。“彼らの暮らしに対する愛や命を謳歌して楽しんでいることは変わらなかった。変わっていくものと変わらずに続いていくものを感じ取ることで、変化を受け止めることができた”。一方でDさんは、ディプリングへ向かう道中のガイドとの関わりをこのように語った。

Dさん：“ディプリングに向かう途中、Jさんの知り合いに沢山会った。村の人たちは全員Jさんのことを知っていて、Jさんも彼らのことをよく知っていた。昔はこういうことがあって、こういうことをよくしたとか、過去の記憶をよく覚えていて、Jさんの心の中に村の人たち、一人ひとりがいるんだなって…自分たちも、Jさんやその仲間が歩いた道を、一緒に歩かせてもらっているような感覚だった”

Eさん・Dさん共にラダックに暮らす人々の想いに心を馳せているようであった。



図2.ディプリング村の人々と景色（写真(1), (2)共にインフォーマント撮影, 2024.07.20）

考察

本研究では、「畏敬の念」に着目し、インド・ラダックにおけるトランスフォーマティブ・ツーリズムの事例を交えながら、ツーリズムへの参加動機と変容内容についてエスノグラフィックの手法を用いて検討した。その結果、「生きづらさ」「ノスタルジア」「神秘的な体験」「対話の鏡」「地続きの暮らし」「心の追体験」が重要な要素であると考えられた。以下、先行研究を本研究で得られた結果と照らし合わせながら、畏敬の念と変容との関係性を位置付けていく。

“彼らは癒しを求めてラダックに来るのかもしれませんが…癒しという言葉は使わないけど、彼らがそう思っているのはわかる。東京には癒しの場所がないからね”というJ氏の語りを裏付けるかのように、日本の物質的な豊かさとラダックの心の豊かさを対比しながら、生きづらさからの「解放」と「癒し」を求めてラダックへ来ている人が多かった。この「解放」には、①全く別の秩序・枠組みの世界へと入ること、②言語に支配された自分の思考からの解放の2つの意味があると考えられる。本調査のディスティネーションは日本から遠く離れた僻地であり、参加者は現実社会から物理的に解放された状況であった。Cさんは他者との対話を通して心理的な自由を獲得していった。これは非日常下で自分の感情と客観的に向き合いながら、社会の秩序や固定化された価値観に捉われる自己を解放していくプロセスを辿っていた。一方で日本語が堪能な通訳兼ガイドが同行しており、参加者同志のコミュニケーションも日本語で行われていた。そのため②の影響については十分に検討できていないと考えられる。西村(2022)は人間にとっての全ての活動は言語によって規定されており、言語活動の終息は一切の活動の停止に他ならない。禅や道教は人間の言語活動を徹底的に問題化し、真の自己を探求していると指摘している。従って、言語が排除された世界におけるトランスフォーマティブ・ツーリズム、例えばラダックと同様に雄大な山々に畏敬の念を抱きやすく、言語活動を完全に排除した国内の修験道体験ツーリズムの文脈と比較検討していくことは内的な変容をより精緻に捉えることにつながるであろう。

また筆者は、「完全なる参加者」としてシャーマン体験をした。この体験はラダック出身のJさんのネットワークを生かしたものであり、そのため、その場に集まった約40名のうち9割程度が敬虔なチベット仏教徒であった。シャーマンがトランス状態に入って超自然的存在と交信する現象を目の前に、筆者自身も一種のトランス状態を体験した。シャーマンが太鼓と鐘を鳴らし、マントラを唱えながら狂気に満ちたように人格が変わっていく姿は、まるでシャーマンが魔法をかけて、日常を「聖なる空間」へと変えていくようであった。同じリズムで繰り返されながらも、少しずつテンポが速くなっていく太鼓と鐘の音が、トランス状態をよりスムーズに誘うかのようなようであった。加えて、地元の人たちが熱心にシャーマンの言葉に耳を傾けている姿やシャーマンが病人の患部に管を当てて黒い液体を吸い出す光景は宗教的儀式をより神秘的なものとし、彼らの信仰の篤さを象徴化するものでもあった。それらのシーンをより印象づける役割として、通訳兼ガイドの存在があったように思われる。またAさんはチベット仏教の僧院での神秘的な体験後に、目に見えない世界の存在を信じざる得なくなった。Barrett(2000)によると、人間は「超活発なエージェンシー検出装置」を備えており、エージェンシー検知は人間が神を信じるための基礎として仮定されてきた(Gray & Wegner, 2010)。畏敬の念を抱く体験は不確実性に対する耐性を低下させ、意味形成プロセスによる認知的な適応の必要性を生じさせる。その結果、非人間的なエージェントを信じ、ランダムな出来事に人間の代理性を見出す傾向が強まることが明らかとなっている(Valdesolo & Graham, 2014)。従って、神秘的な体験がAさんのエージェンシー検出装置を発動させ、実体のないものの存在を信じさせるに至ったのではないかと推察される。今回、神秘的な体験にはラダックの壮大な景色を見ること、シャーマン体験、チベット仏教の僧院への訪問があった。ラダック地方へ訪れる多くの観光客が雄大な自然を目にし、チベット仏教の僧院を巡っていることを考慮すれば、二重の意味での変容が起こっている可能性は否定できない。この2つの体験が重なることが必要であるのか、もしくは何か1つの体験で良いのかは議論の余地がある。

Lean (2012)は、変容は、旅の「前」・「最中」・「後」の要素が複雑に絡み合っていることを明らかにしている。Bさんはラダックから帰国後の約1ヶ月間、イライラしたり苦しいと感じたりすることが多かったと語った。それまでの誰かに目標や期限を設定される慣れ親しんだ人生から、自己の意思で自由に生きる人生への移行期であったことが起因していると振り返った。またDさんが“実際に旅から帰ってきて、経験するものはして、心に残るものは残っていて、今後これがどう生きていくのかは分からないが、生活をしていく中で発露してくるもの”と語るように、真の意味での変容がどのタイミングで訪れるのかは、個人によってばらつきがあるように思われる。従って、今後トランスフォーマティブ・ツーリズム体験者が日常へ戻った際に、具体的にどのような行動変容を起こすのかをより精緻にみていくことは、変容をより包括的に捉える上で重要であろう。

結論

本研究では、畏敬の念に着目してトランスフォーマティブ・ツーリズムへの参加動機と変容内容を探ってきた。ラダックは、過ぎ去った時代を求める精神性と永遠性として意味づけられ、急速に発展してきた物質主義的な現代社会からの逃避として訪問する価値が付与されている。つまり近代化・産業化は脱埋め込みされた人々に自己に対する不安感や焦燥感など心理的な葛藤を生み出し、常に自らのアイデンティティを支える拠り所を内部に求める、自己理解や自己内省の強い希求を生み出している。トランスフォーマティブ・ツーリズムは旅行者を心理的な葛藤から脱却させ、包括的な世界観を醸成し、異文化理解と社会的エンパワーメントを促進することに焦点を当てている。本研究は、個人の意識の変容が社会の変容へと普遍的な議論に、ツーリズムを近づける一助となることも期待される。

引用文献

- Algoe, S. B., & Haidt, J. (2009). Witnessing excellence in action: The 'other-praising' emotions of elevation, gratitude, and admiration. *The Journal of Positive Psychology, 4*(2), 105-127.
<https://doi.org/10.1080/17439760802650519>
- Anderson, C. L., Monroy, M., & Keltner, D. (2018). Awe in nature heals: Evidence from military veterans, at-risk youth, and college students. *Emotion, 18*(8), 1195-1202.
<https://doi.org/10.1037/emo0000442>
- Barrett, J. L. (2000). Exploring the natural foundations of religion. *Trends in Cognitive Sciences, 4*(1), 29-34. [https://doi.org/10.1016/S1364-6613\(99\)01419-9](https://doi.org/10.1016/S1364-6613(99)01419-9)
- Brian, Harrison. (2021). The impact of a tourism boom in an environmentally-sensitive region: a case study of Ladakh (Kashmir, India). *総合政策研究, 29*, 21-41.
- Fredrickson, B. L. (2013). Positive emotions broaden and build. *In Advances in experimental social psychology* (Vol. 47, pp. 1-53). Elsevier. <https://doi.org/10.1016/B978-0-12-407236-7.00001-2>
- Gordon, A. M., Stellar, J. E., Anderson, C. L., McNeil, G. D., Loew, D., & Keltner, D. (2017). The dark side of the sublime: Distinguishing a threat-based variant of awe. *Journal of Personality and Social Psychology, 113*(2), 310-328. <https://doi.org/10.1037/pspp0000120>
- Gray, K., & Wegner, D. M. (2010). Blaming God for our pain: Human suffering and the divine mind. *Personality and Social Psychology Review, 14*(1), 7-16.
<https://doi.org/10.1177/1088868309350299>
- HAKUHODO inc. & SIGNING inc. (2024). SBNR なライフスタイルとは？. SBNR Report. Retrieved September 20, 2024, from https://signing.co.jp/pdf/sbnr_report.pdf
- Harvey, A. (2000). *A journey in Ladakh*. Houghton Mifflin Harcourt.
- Irimiás, A., Mitev, A., & Michalkó, G. (2021). The multidimensional realities of mediatized places: The

- transformative role of tour guides. *Journal of Tourism and Cultural Change*, 19(6), 739-753.
<https://doi.org/10.1080/14766825.2020.1748884>
- 観光庁 (2022). 旅行・観光消費動向調査. Retrieved September 20, 2024, from
https://www.mlit.go.jp/kankocho/page02_000193.html
- Keltner, D., & Haidt, J. (2003). Approaching awe, a moral, spiritual, and aesthetic emotion. *Cognition and Emotion*, 17(2), 297-314. <https://doi.org/10.1080/02699930302297>
- Lean, G. L. (2012). Transformative travel: A mobilities perspective. *Tourist Studies*, 12(2), 151-172.
<https://doi.org/10.1177/1468797612454624>
- Maruskin, L. A., Thrash, T. M., & Elliot, A. J. (2012). The chills as a psychological construct: Content universe, factor structure, affective composition, elicitors, trait antecedents, and consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 103(1), 135-157. <https://doi.org/10.1037/a0028117>
- Nelson-Coffey, S. K., Ruberton, P. M., Chancellor, J., Cornick, J. E., Blascovich, J., & Lyubomirsky, S. (2019). The proximal experience of awe. *PLoS one*, 14(5), e0216780.
- 西村則昭 (2022). ラカンのジョイス論と道元の「身心脱落」. 宗教研究, 96(1), 1-24.
https://doi.org/10.20716/rsjars.96.1_1
- Piaget, J. & Inhelder, B. (1969). *The psychology of the child*. Basic Books.
- Rivera, G. N., Vess, M., Hicks, J. A., & Routledge, C. (2020). Awe and meaning: Elucidating complex effects of awe experiences on meaning in life. *European Journal of Social Psychology*, 50(2), 392-405.
- Schurtz, D. R., Blincoe, S., Smith, R. H., Powell, C. A. J., Combs, D. J. Y., & Kim, S. H. (2012). Exploring the social aspects of goose bumps and their role in awe and envy. *Motivation and Emotion*, 36(2), 205-217. <https://doi.org/10.1007/s11031-011-9243-8>
- Sheldon, P. J. (2020). Designing tourism experiences for inner transformation. *Annals of Tourism Research*, 83, 102935. <https://doi.org/10.1016/j.annals.2020.102935>
- Shiota, M. N., Campos, B., & Keltner, D. (2003). The faces of positive emotion: Prototype displays of awe, amusement, and pride. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 1000(1), 296-299.
<https://doi.org/10.1196/annals.1280.029>
- Soulard, J., McGehee, N. G., Stern, M. J., & Lamoureux, K. M. (2021). Transformative tourism: Tourists' drawings, symbols, and narratives of change. *Annals of Tourism Research*, 87, 103141.
<https://doi.org/10.1016/j.annals.2021.103141>
- Stellar, J. E., John-Henderson, N., Anderson, C. L., Gordon, A. M., McNeil, G. D., & Keltner, D. (2015). Positive affect and markers of inflammation: discrete positive emotions predict lower levels of inflammatory cytokines. *Emotion*, 15(2), 129. <http://dx.doi.org/10.1037/emo0000033>
- Van Cappellen, P., & Saroglou, V. (2012). Awe activates religious and spiritual feelings and behavioral intentions. *Psychology of Religion and Spirituality*, 4(3), 223-236.
<https://doi.org/10.1037/a0025986>
- Valdesolo, P., & Graham, J. (2014). Awe, uncertainty, and agency detection. *Psychological Science*, 25(1), 170-178. <https://doi.org/10.1177/0956797613501884>
- Williams-Oerberg, E. (2020). A Unique Selling Proposition (USP) in Ladakh. *Buddhist Tourism in Asia*, 227.
<https://doi.org/10.1515/9780824882822-014>